

編集人：ぶくぶくの会 〒564-0025 吹田市南高浜町1-17-2A (総務)  
TEL 06-6317-5598、FAX 06-6317-0936 Mail: so-mu@puku-2.com URL: www.puku-2.com  
代表：馬垣安芳 編集長：上田かおり 1部200円  
年間購読料：個人会員2000円 広報会員(3部)5000円  
法人会員1口(5部)10000円 賛助会員(1部)10000円  
振替口座00940-0-161341  
「まねき猫通信」



もくじ

とくしゅう きょだいたいふう こくさいしえん  
特集：フィリピン巨大台風への国際支援を - 2  
しんぱい ひとでぶそく すずきつとむ  
リレーエッセイ：心配なのは人手不足 - 鈴木勉 - 4  
せいじ きょういく かいにゆう こわ いしづかなおと  
政治が教育に介入する怖さ - 石塚直人 - 5  
せつ はんごや はいどんや  
石けんライフ：灰小屋と灰問屋 - 6

題字：  
塩澤 文男  
(しおざわ・ふみお)



umako,

いぶき  
絵：まこ なまこ

トリの眼・ムシの目・ニャンコの目

カナダでの話。バンクーバー空港で国際線の旅客機が離陸準備をしていた。二列席の窓側には黒人男性が早々と着席し、コーヒを飲みながら新聞を読んでいた。少し時間が経って、空いていた通路側の席に初老の白人女性がやってきた。黒人男性を一瞥した彼女は、突然、あからさまに怪訝な顔つきになり、持っていたハンドバッグを投げ捨てるように席に置いて、上半身を振るわせながらスチュワーデスに怒鳴った。「ちよっと、あなた！これから東京まで11時間もフライトするのよ。私に、この男の横でずっと座っていろって言うの?!」どうして、私の横の席がニグロだつて教えてくれなかったの!とても不愉快だわ、席を変えてちょうだい!」男性は呆れかえり、目を丸くして声も出ない。その時、若いスチュワーデスが即座に答えた。「お客様、他に空席がございましたら、すぐそちらに移動していただくのでございますが、生憎、本日この便のエコノミークラスは満席でございます。お席の変更は無理でございます。」「ご不快な思いをさせたお詫びといたしまして、料金はそのまま、ビジネスクラスのお席へご案内いたします。さあ、どうぞこちらへお越し下さい。」スチュワーデスは、黒人男性を手招きした。

た。(ハギ)

# フィリピン巨大台風被害

## 災害と

# 手の届かない障害者への国際支援を

障害と開発コンサルタント 千葉寿夫さん

きよだいたいふうひがい

こくさいしえん

しょうがいしゃ



▶被災者に話を聞く視察隊。3カ月経っても、基礎的な生活インフラが復旧していない



▶巨大な船も打ち上げられた

昨年11月、フィリピンを直撃した台風30号・

ヨランダ(フィリピン名)によって、中部レイテ島を中心に高潮や土砂崩れなどによる甚大な被害が発生しました。死者・行方不明は7千人を超え、避難した被災者が390万人とも言われる深刻な被害です。ところが、災害復興支援が遅々として進まず、3カ月経った今も、食料・水の不足、衛生環境の悪化など被害拡大のおそれすらあります。

とりわけ障害者にとっては、東日本大震災でも見られたように、食料などの支援助資を配給しているところまでたどり着くことができない。

### 想像を絶する

### 台風被害

ヨランダ台風発生から88日目にあたる2月3日、DPI日本

会議、ゆめ風基金・ふくふくの会、AJU自立の家のみなさん

に同行し、今回もつと甚大な被害を受けたフィリピン中部・

タクロバン市を視察しました。被災現地に足を運んだのは、昨年11月末にセブ島北部の訪問に続いて2回目です。

避難所を利用できない、情報が得られないなど、困難な状況に置かれます。

8月にも大洪水災害があり、すでに動き出していたゆめ風基金と、DPI日本会議が協働して今回の被災障害者支援のため、現地調査が行われました。タクロバンの障害者共同組合のメンバーを中心に聞き取りが行われ、車イスなど福祉機器の提供等が進められます。フィリピン大学に留学中でアジア途上国の障害者の状況を情報発信している千葉寿夫さんが現地での協力者として同行されたので、報告をお願いします。(文責・編集部)

ました。障害者連盟の方にお話を聞きましたが、彼らも「まだ行ける状況でない」という状況

### 障害者の直接参加が重要

この時は、フェリーに乗ってバンタヤン島へ行き、被災した3人の視覚障害児の住居と特別支援学校を訪問しました。

フィリピンでは、障害者のインクルーシブ教育の推進として、各地方にSPEDと呼ばれる学校があります。普通学校の敷地内に併設された障害児用の教室が、視覚・聴覚などに分か

でした。フィリピン政府やNGOは一般の救助に手一杯で、障害者は取り残されているように、「緊急に、薬、福祉機器などが必要になる」とのことでした。

今回視察をしたタクロバンも、当時はどうなっているのか分からない状態で、障害者団体もバラバラに動いている感じでした。

昨年11月末の段階では、災害から20日ほど経っていたにもかかわらず、セブ島北部は電柱が軒並み倒れているため、電気も復旧していませんでした。

風速100mの強風による家屋の倒壊が主な被害で、学校や体育館など大きな建物でも、屋根が吹き飛び鉄骨があらわに曝されていました。

この時は、RBI(視覚障害者支援基金)の視察に同行させて頂きました。代表のランデー氏は、視覚障害学生支援プロジェクトで日本財団時代に一緒に仕事をしていた同僚です。彼らは、現地の特別支援学校と提携しているので、視覚障害児がどこに住み、どのような被害を受けているのか把握していました。

れて設置されている学校です。訓練された教師が視覚障害児には触図や点字を使って教えたリ、聴覚障害児には手話を教えたりします。一般クラスでもやっていける学力があると判断されれば移動もできるそうです。一般クラスで主席を取る障害児もいるそうです。幸い特別支援教室には被害がなかったそうです。

ランデーとRBIスタッフは、すぐに被害状況を細かく確認し、住居の修繕に必要な資料や工程、そして費用を算出していました。また連絡が取れないレイテ島(タクロバンなど)を考えると、100軒以上の視覚障害児の住居が深刻な被害を受けているようでした。日本からの支援を考えれば、生活再建は寄付や基金で支援し、コミュニティレベルの障害者を含んだ防災戦略は、専門的に計画し、長期に実施されなければならぬでしょう。その時、障害者の参加が何よりも重要になります。



▲手前左からDPI日本会議の堀場さん、AJU自立の家エージェンシーの小倉さん、千葉さん。奥側左から馬垣さん、佐藤神父、マニラの障がい者団体のアブナーさん。

### タクロバン現地で ニーズ調査

今回の視察では、タクロバン障害者共同組合のメンバーを中心にヒアリングし、被害状況を確認しました。

2月3日午後4時、タクロバン空港に降り立つと、ターミナルはまだ被害を受けており、荷物置き場も屋根があるだけ、吹きさらしの状態でした。空港から外に出ると、市内に進む道には、国連の簡易テントが散在し、倒壊したビルが残され、電線が垂れ下がり、寸断されて...

幹線道路の脇にはUNHCR(国連難民支援機関)やUNICEF(国連児童基金)のテントが並び、掘

建て小屋みたいなキオスクが並んでました。建物もまだ壊れたものが多かったです。市内に入ると、さすがに人通りが多くなり、復旧支援のトラックやバンとともに、トライシクル(サイドカーを着けたバイクタクシー)やジプニー(小型乗合バス)などが行き来してました。店はオープンしているものの、電気は一部復旧に留まり、物資は一応揃ってますが、簡素に並べてあるだけでした。

コンベンション・センターの周りに避難所が用意されていましたが、水道もまともに来ておらず、テント横の側溝には下水が溜まっています。そして海に突き出した簡易トイレが、衛生環境の悪さを物語っています。電気は簡易の太陽光発電機で、太陽光と言えは聞こえは良いのですが、玩具みたいな材料にLEDが付き、わずかな明かりと携帯の充電くらいしかできない代物です。

被害から3ヶ月近くたってても電気も復旧していない、というのは、話しては聞いていたものの、正直、これほど進んでいないのかと、驚きました。バスターミナルで現地の障害者団体が障害者を含む社会的弱者の被災状況や避難の状況を聞き取り調査し、電子ファイルとして恒久的に保存することを考えているようです。フィリピン中部は毎年強い台風が予測されるため、被害を少しでも防ぐために、過去の教訓から学ぶことが非常に重要です。

### 政府の支援策 と日本の役割

インフラ整備の遅れは中央政府に期待したいのですが、障害者支援に関しては、政府機関である全国障害者協議会と民間団体の全国障害者連盟(A.K.Pinoy)が協力して、復興支援策を策定中です。2月下旬に関係諸団体を集め、マニラで支援内容を協議し、実施する予定になっています。その他にも、国立国会図書館

ら、落ち合い、その日は簡単に打合せをしました。翌4日、障害者団体の事務所で現状の確認をしました。タクロバン市内のTAPDIICOという障害者約20名の共同組合を通して、障害者のニーズ調査や現状調査、事務所に来られない障害者の自宅訪問を行いました。彼らが集めた障害者リストを頂き、現状のヒアリング。その後、車イス等の福祉機器が必要な人15人以上との面談を行い宿舎に戻りました。彼(女)らは、当面の食料や住居は確保できているもの

の、生活上の困難を多く抱えており、特に知的障害児の親には公的支援もなく、病院にも行かず、負担を一人で抱え込んでいくようでした。視覚障害者夫妻にも出会いましたが、避難所の簡易テントで娘と親の4人生活を余儀なくされていきました。今回面談した障害者の多くは、震災以前から生活上の困難を抱えていました。TAPDIICO自体は共同組合であり、組合員として働ける障害者には収入があります。それが、それ以外の障害者は自力で生計を立てなければならなりません。就職口は限られ、家族の世話になる人も多く、障害当事者団体が組織されていないタクロバン市では、利用できる資源も限られています。今回の支援は主に福祉機器の提供などが中心になるため、障害児は体の測定も行い、適切な車イスのサイズを確認していただきました。視察隊は、TAPDIICOの活動支援として、現在の工房や事務所の復旧作業に使うための車(マニラの障害者財団提供)の修理も行い、障害者の移動のため、復旧作業のための必要な支援は直ぐに提供して行きました。

障害者団体と協力すれば、日本からでも十分に有意義な支援を提供することができます。今回は福祉機器の提供を念頭においていますが、寄付金自体も貴重ですし、自助団体の設立を支援する方法もあると思います。フィリピンにいる私たちとしても、現地情報の共有だけでなく、寄付集めなどの具体的な支援に繋がりたいと思います。今後も現地を訪問し、フィリピンの障害者の様子を肌で感じて欲しいと思います。そこから交流が生まれ、知識の共有がな

され、支援に継続性が生まれるかもしれません。台風発生から3カ月近くが経過しても、復興は始まったばかりです。支援を必要としている障害者が沢山いますし、ニーズはいくつかわ確認できました。これからをもとに日本で報告会を開き、具体的な支援策を決めていくこととなります。復興には長期的な取り組みが求められます。日本からできることを考えてみて欲しいと思いますし、息の長い支援をお願いします。

最後に  
国全体の取組みに留意しながらも、日本の障害者団体として地に足のついた支援を提供することは非常に重要です。現地の

全国障害者連盟(A.K.Pinoy)は、全国に440以上の加盟団体を持つ、フィリピン障害者団体・支援団体の連盟で、2005年に設立されました。障害啓発や政策策定などに関わっています。

DPI(障害者インターナショナル)日本会議は、今回のフィリピンにおける被災障害者に対する支援金の受け付けを行っています。マニラの自立生活センター「ライフヘブン協会」と連携し、被災地の障害者に関する情報の収集、必要な支援の手配を行っています。

DPI(障害者インターナショナル)日本会議は、今回のフィリピンにおける被災障害者に対する支援金の受け付けを行っています。マニラの自立生活センター「ライフヘブン協会」と連携し、被災地の障害者に関する情報の収集、必要な支援の手配を行っています。